

待つ

太宰治

省線のその小さい駅に、私は毎日、人をお迎えに参ります。誰も、わからぬ人を迎える。

市場で買い物をして、その帰りには、必ず駅に立ち寄って駅の冷たいベンチに腰を降ろし、買い物籠を膝に乗せ、ぼんやり改札口を見ているのです。上り下りの電車がホームに到着するごとに、たくさんの人が電車の戸口から吐き出され、どやどや改札口にやってきて、一様に怒っているような顔をして、バスを出したり、切符を手渡したり、それから、そそくさと脇目もふらず歩いて、私の座っているベンチの前を通り駅前の広場に出て、そうして思い思いの方向に散っていく。私は、ぼんやり座っています。誰か、一人、笑って私に声をかける。おお、怖い。ああ、困る。胸が、どきどきする。考えただけでも、背中に冷水をかけられたように、ぞっとして、息がつかまる。けれども私は、やっぱり誰かを待っているのです。いったい私は、毎日ここに座って誰を待っているのでしょうか。どんな人？ いいえ、私の待っているものは、人間でないかもしれない。私は、人間を嫌いです。いいえ、怖いのです。人と顔を合わせて、お変わりありませんか、寒くなりました、などと言いたくもない挨拶を、いかげんに言っていると、なんだか、自分ほどのうそつきが世界中にいないような苦しい気持ちになって、死にたくなります。そうしてまた、相手の人も、むやみに私を警戒して、あたらずさわらずのお世辞やら、もったいぶったう

その感想などを述べて、私はそれを聞いて、相手の人のけちな用心深さが悲しく、いよいよ世の中が嫌で嫌でたまらなくなります。世の中の人というものは、お互い、こわばった挨拶をして、用心して、そうしてお互いに疲れて、一生を送るものなのでしょうか。私は、人に会うのが、嫌なのです。だから私は、よほどのことでもない限り、私のほうからお友達のところへ遊びに行くことなどはいたしませんでした。家において、母と二人きりで黙って縫い物をしてると、いちばん楽な気持ちでした。けれども、いよいよ大戦争が始まって、周囲がひどく緊張してまいりましてからは、私だけが家で毎日ぼんやりしているのが大変悪いことのような気がしてきて、なんだか不安で、ちっとも落ち着かなくなりました。身を粉にして働いて、直接に、お役に立ちたい気持ちなのです。私は、私の今までの生活に、自信を失ってしまったのです。

家にもありません。買物をして、その帰りには、駅に立ち寄って、ぼんやり駅の冷たいベンチに腰掛けています。どなたか、ひょいと現れたら！ という期待と、ああ、現れたら困る、どうしようという恐怖と、でも現れたときにはしかたがない、その人に私の命をさしあげよう、私の運がそのとき決まってしまうのだというような、諦めに似た覚悟と、その他さまざまのけしからぬ空想などが、異様に絡み合って、胸がいっぱいになり窒息するほど苦しくなります。生きていくのか、死んでいるのか、わからぬような、白昼の夢を見ているような、なんだか頼りない気持ちになって、眼前の、人の往来のありさまも、望遠鏡を逆にのぞいたみたいに、小さく遠く思われて、世界がシンとなってしまふのです。ああ、私はいったい、何を待っているのでしょうか。ひょっとしたら、私は大変淫らな女なのかもしれない。大戦争が始まって、なんだか不安で、身を粉にして働いて、お役に立ちたいというのうそで、本当は、そんな立派そうな口実を設け

1 【省線】鉄道省などが管理していた鉄道路線。
5 【バス】通行証。乗車券や入場券など。
14 【あたらずさわらず】さし障りのないように適当にこまかす。

6 【大戦争】太平洋戦争のこと。
8 【身を粉にして働く】どのような苦勞にも耐えて、脇目もふらず一生懸命に働く。

て、自分の軽はずみな空想を實現しようと、なにかしら、よい機会を狙っているのかもしれない。ここに、こうして座^{すわ}って、ぼんやりした顔をしているけれども、胸の中では、不埒^{ふらち}な計画がちらちら燃えているような気もする。

いったい、私は、誰^{だれ}を待っているのだろう。はっきりした形のものは何もない。ただ、もやもやしている。けれども、私は待っている。大戦争が始まってからは、毎日、毎日、お買い物^{お買いもの}の帰りには駅に立ち寄り、この冷たいベンチに腰^{こし}を掛けて、待っている。誰^{だれ}か、一人、笑って私に声をかける。おお、怖い。ああ、困る。私の待っているのは、あなたでない。それではいい、私は誰^{だれ}を待っているのだろう。どんな様^{よう}。違う。恋人^{こいびと}。違います。お友達^{ともだち}。嫌^{いや}だ。お金。まさか。亡霊^{ぼうれい}。おお、嫌^{いや}だ。

もっと和^{なご}やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの。なんだか、わからない。例えば、春のようなもの。いや、違う。青葉^{あざ}。五月。麦畑^{むぎはた}を流れる清水。やっぱり、違う。ああ、けれども私は待っているのです。胸を躍^{わど}らせて待っているのだ。目の前を、ぞろぞろ人が通っていく。あれでもない、これでもない。私は買い物籠^{かご}を抱^{かか}えて、細かく震^{ふる}えながら一心に待っているのだ。私を忘れないでくださいませ。毎日、毎日、駅へお迎^{むか}えに行^いっては、むなしく家へ帰^{かえ}ってくる。二十^{はたち}の娘^{むすめ}を笑わずに、どうか覚えておいてくださいませ。その小さい駅の名は、わぎとお教え申^{まを}しません。お教えせずとも、あなたは、いつか私を見かける。

〈出典 『太宰治全集』(筑摩書房、一九八九年)〉

【著者】太宰治(だざいおさむ)

一九〇九(明治四二)年—一九四八(昭和二三)年

作家。青森県の生まれ。

【著書】『人間失格』『富嶽百景』『ヴィヨンの妻』など

2 【不埒な】道理やきまりから外れていて許せない。